

箭山紀行

「龍の珠」の秘話

天明三年（一七八五）から始まった日照り続きによる大飢饉は、豊前中津地方でも三年目に入ろうとしていました。この地域にある溜池のほとんどもが干上がり、村々の小さな川はもちろんのこと山国川さえも白い川底をみせるほどでした。

人々は、この先いつたいどうなることかと、案じつつもなす術はなく只々天を仰いでは嘆くばかりでした。

このような状況に藩の菩提寺でもある自性寺の海門和尚は、人々の苦しむさまを見て、なんとかせねばと決心し自ら厳しい『雨乞いの行』



中津藩の菩提寺である自性寺

○編集・発行 三光周辺地域振興対策推進会議
「グローバルネット三光」
○連絡先 中津市三光支所内事務局 TEL 43・2050

を行うことにしたので、和僧がこの行の場に選んだのは八面山の山頂の辺りにある大池でした。そして海門和尚は、自分の留守中、昼夜怠りなく大般若経を唱え続けるようにと僧たちに申し付け、ただ一人山に向かいました。大池の畔に設けた「雨乞いの座」に籠もると、一切の飲食を断ち、ひたすら経を唱え祈り続けました。



美しい水面を見せる大池

七日七夜続けられた雨乞い祈願は、その満願を迎えた日、急に一陣の風が巻き起こり大池の水がざわざわと波立ったかと思うと、顔は女、体は龍の姿をした龍女が突然姿を現しました。そして龍女が和尚にむかい、

「今、天に雨雲はなく、いくら雨乞いをしても無駄でしょう。しかし、和尚が私の珠を受け、成仏させてくれるのなら、一命を投げ打つてでも雨を降らせて見せましょう。」と言ったのです。

これを聞いた和尚は、大願が成就した暁には、

「必ずやあなたを成仏させてあげましょう。どうか雨を、降らせてください。」

と、日照りに喘ぐ人々の苦しみを説いたので、

すると龍女が姿を消して程なく、一転して空はかき曇り、山は鳴り谷に響き渡るほどの激しい雨が降り始めました。

この雨は五日間にわたって降り続き、カラカラに干上がっていた田も畑も生き生きと蘇りました、里人たちは精一杯のもてなしで、海門和尚を迎えたのでした。



海門和尚画像

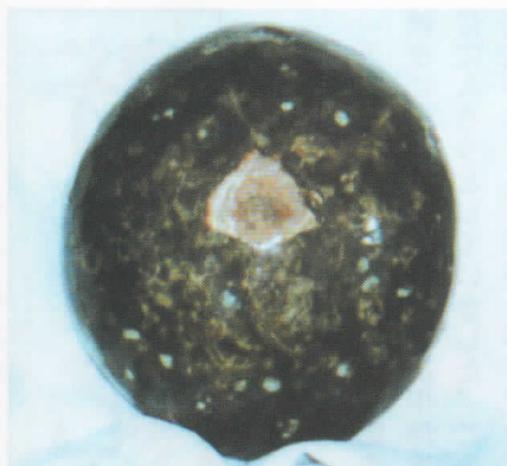
この「雨乞い」の時、中津藩主奥平昌男公は参勤交代で江戸詰めでしたが、国元でのこの喜びを聞き、海門和尚に歌をしたためた書状を送っています。また翌年、自性寺に永代知行として、五十石の加増をしています。

「尊しなみのりの道の 雨露に
ぬれていろます 田方の民草」

昌男

その後、文化元年(一八〇四)、海門和尚は、その徳行と業績により朝廷から「圓通妙覺禪師」の号を賜っています。

ところで海門和尚が龍女から渡された『珠』は、その後どうなったのか。八面山から持ち帰った時、この珠は柔らかかったとされています。今も自性寺に大切に保管されています



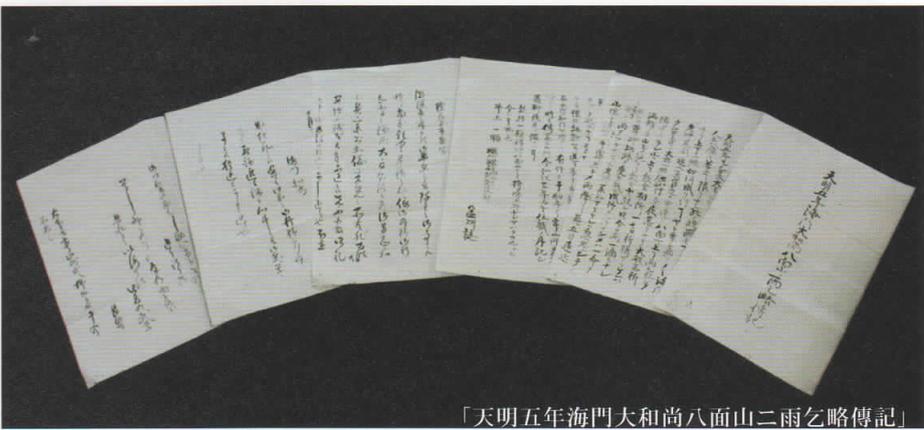
自性寺に保管されている「珠」

が、ただ、すっかり硬くなっています。(硬くなつた理由には諸説あり)

この《龍の珠》の話は、自性寺に伝わる『天明五年海門大和尚八面山二雨乞略傳記』を見せていただき、さらに河北一直住職から「龍の珠」「海門和尚画像」「海門和尚の墓」などについての貴重な説明を受けて綴ったものです。

雨乞いの場

としてなぜ八面山山頂の大池を選んだのか。沖代平野からはるかに見渡す山並み、その中で、ひときわゆったりとその雄姿を見せる八面山は、古から信仰の山であり、海門和尚がその頂上にある大池の伝説を知っていたからでしょう。日照り続きに喘ぐ人々の姿を目にしたとき、和尚は迷うことなく「ここしかない！」と考えたのに違いありません。ふるさとの山、八面山はここでも人々を守る大きなドラマの舞台になっていたのです。



「天明五年海門大和尚八面山二雨乞略傳記」

『山を、山で、描く人々の想い』

第十六回「八面山スケッチ大会」では、子どもたちから六十八点、大人から四十九点の力作が寄せられた。いずれも「ふるさと」を象徴するこの山が様々な角度から描かれている。

大会が開催された五月十五日、野外音楽堂には大勢の親子連れが集まり、主催者から供される画用紙を手にすると思い思いの場所へと散って行った。大きな自然の中に身を委ねてみると日頃は気づかないものが見えてくるようだ。今大会で大賞に選ばれたのは、秣小三年の外園寛樹君の『かっこいい多聞天』、宇佐高二年の浜崎寧々さんの『向こうに見える八面山』、一般からは塚本文憲さんの『屋形より八面山を望む』の三作品だった。

審査員の外園雅美氏は「大人から子どもまで、この山をテーマに描くことこそが、ふるさとへの想いをあつくする」と語った。

新春には、「八面山書道大会」も開かれる。山は、ただそこにあるというだけで、里人にとっての“文化”や“情報”の発信源となる…。

スケッチ大会のひとコマ

